

翔ぶが如く

映画文学人生論

原作：司馬遼太郎（1972-76年『毎日新聞』連載）

脚本：小山内美江子 1990年 NHK大河ドラマ

出演：西郷隆盛 西田敏行
大久保利通 鹿賀丈史

参考：The Last Samurai (2003)

オールグレン トム・クルーズ 勝元 渡辺謙

泣こよつか、ひっ翔べ

『翔ぶが如く』はともに力をあわせて明治維新をなしとげながら、西南戦争では敵味方に別れて戦った薩摩隼人たちの物語である。作者の司馬遼太郎は桜島をとりまく錦江湾の青い海を眺めて、「泣こよつか、ひっ翔べ」

という上代以来の隼人（はやと）どもの心を、この青が染めあげたかと思われるほどに陽気だったと語りはじめ。

原作は文春文庫で全十冊の長編。その内容は一本の映画にはとてもおさまりきらない。しかし、NHK大河ドラマとして放映され、DVD全十三巻にまとめられた。原作の時間が明治維新から西南戦争までの十年間であるのに対し、ドラマは弘化三年（1846）、薩摩藩お家騒動からはじまっている。明治維新になって、原作と内容が重なってくるのは全四十八話のうち第三十話からだ。

私は黒船来航から西南戦争までの歴史を理解したいと思って、原作を三回読み、ドラマも観た。したがって、知識としてはかなりわかったような気がしてきているが、リクツでは、なぜだ？という疑問をぬぐいさることができない。

尊皇攘夷、王政復古をとなえて倒幕をはたした新政府が攘夷を捨て欧化を推進したのはなぜか。勝てば官軍という以外に大義名分はあるか。これは『夜明け前』の青山半蔵が抱いた疑問だ。

西郷隆盛が征韓論をとなえた理由もよくわから



翔ぶが如く

映画文学人生論

ない。大久保利通がそれに反対しながら、台湾出兵を強行した理由はますますわからない。なぜ維新政府は欧米列強にならって国民皆兵による富国強兵路線で突っ走ったのだろうか。なぜアジアの諸国が仲良く結束する道を選ばなかったのか。

これらの疑問への答は『翔ぶが如く』を読めばある程度はわかる。日本は攘夷を捨て、開国を選んだが、幕府主導ではなく、薩長主導による開国——大義名分は王政復古、ホンネは権力奪取だ。

権力の交替にともない、佐幕派は切り捨てられた。廃藩置県で藩主 廃刀令で士族が切り捨てられた。王政復古に感激した国学者は文明開化に取り残された。庶民は増税の負担に加えて、兵役の義務も課せられた。これでは権力のおこぼれにあずかった者以外は、いいことは何もない。

不満がたかまり、特に不満士族のエネルギーが征韓論に結集した。西郷隆盛は一命を捨てる覚悟で遣韓大使を希望したが、それを認めると戦争になり、列強の干渉を招いて、日本は亡びる。そこで大久保利通らが西郷の遣韓を阻止し、それが西南戦争に発展したということのようだ。

その後も国民の不満は続くが、『翔ぶが如く』は西郷隆盛の戦死と大久保利通の暗殺で終わる。西南戦争に参加したアメリカ人を主役とする映画『ラストサムライ』を参考作品として観た。

廃刀令へラストサムライ翔ぶが如く